

借金お嬢クリスマス3

令嬢はいかにして42兆円を返済したか？

筑摩十幸

挿絵／了藤誠仁



立ち読み版

龍皇寺クリス

りゅうおうおうじ



ジグレットの罠により42兆円の負債を負った、龍皇寺グループの元・令嬢。ガーランドと合体してジグレットに対抗するも、敗北、囚われてしまう。

ガーランド



クリスに協力する銀髪の武装精霊。しかし彼女とともに囚われ、子供の姿にされてしまう。

美月レイ

みつき



借金のカタに魂を奪われながらもクリスをサポートするメイド。

巖島サキ

いづくしま



巖島重工の令嬢。武装精霊の愛猫タマと合体するクリスのライバル。しかしジグレットの手に堕ち…。

都倉雛子



諸星学園に通う庶民の娘。ガーランドにほのかな恋心を抱きつつ、クリスの借金返済の戦いに協力する。

ヴァネッサ



オージェ財団の総帥。ガーランドをクリスの元に送り込み、ジグレットの討伐を企む美女。

ジグレット



クリスを陥れた異世界の住人。クリスを捕らえ、自分の花嫁として調教する。

ヴァルチャア



寡黙で何を考えているのかわからない、ヴァネッサの従者。ローブを纏っている。

第二章 フェイク

諸星^{もろぼし}学園生徒会室に一人の少女が佇んでいた。三つ編みにしたお下げと大きな黒縁の眼鏡がトレードマークの少女は都倉^{とくら}雛子^{ひなこ}だ。

「クリスさん……やっぱり、今日も戻られないんですね……」

寂しげな溜息を一つ。生徒会長であるクリスが私物化した部屋には、彼女が持ち込んだ液晶テレビや雑誌などが置かれている。主を失ってからおおよそ一ヶ月、それらにもうつすらと埃が積もっていた。もう一人の生徒会長^{いづくしま}厳島サキと毎日のように喧嘩していた騒々しくも楽しかった日々が懐かしい。

「そうだ……お掃除でもしようかしら。うん……そうです。クリスさんが戻ってきた時に、汚れていては失礼ですよね」

『いい加減、現実逃避はやめにしないか』

声をかけられてビクッと小さな肩を震わせる。生徒会長の机の陰から姿を現したのは美しい毛並みを持つ白ネコのタマだった。厳島重工が開発し、サキとともに闘った人工武装精霊。その知能は世界屈指のスーパーコンピューター並だと言われている。

『キミがここを掃除しようと、いくら待とうと、クリスもサキも帰っては来ない』

「……………っ!!」

『雛子。キミの力が必要だ』

オパールのような神秘的な輝きを持つオッドアイが、ジッと雛子を見据えた。

「タマさん……だから私には無理だと言ってているじゃないですか。私はクリスさんやサキさんみたいに闘うことなんてできません」

『私の計算ではキミの体内マナ濃度はクリスに匹敵するモノだ。闘いは我々が全面的にサポートする。怖いのはわかるが、他にジグレットを倒す手段はない。頼む、協力してくれさもないと、この世界は奴の手に支配されることになる』

「そんなの勝手すぎます！　そもそもクリスさんやガーランドさんがあんなことになったのは、タマさんのせいじゃないですかっ！」

追いつめられてしまったからだろうか、雛子は普段のおっとりした様子からは想像もできないような強い口調でタマをなじった。

この一ヶ月、タマは何度も雛子を説得に訪れていたが、雛子がこれほど激昂するのは初めてだった。少し驚いたように耳をピンと尖らせる。

「タマさんはサキさんを助けたいだけなんですっ！　その為に他人を巻き添えにして。世界がどうか、もっともらしい理屈をつけたりして。卑怯ですよっ！」

言ってしまうから雛子は後悔した。辛い思いをしてきたのはタマも同じはずなのに。

「ごめんなさい」

いたたまれない気持ちになって雛子は背を向けた。

『教えてくれ』

「え……？」

出て行くこうとする雛子をタマが呼び止める。表情などあまりないはずの猫の顔が、微妙な感情に揺れているように見えた。

『教えてくれ、雛子。私は……』

「タマさん？ きゃあつ！」

そのとき、数人の女生徒が廊下を駆けて雛子にぶつかった。運動音痴の雛子はそのままごろんとひっくり返ってしまふ。相手はクラスメイトの女生徒だった。

「あうう、どうしたんですか。そんなに慌てて」

「ごめん、雛。それがね、クリスマス様が教室に来ているんだって！」

「えっ!! う、うそでしょ」

雛子は一瞬耳を疑った。タマも怪訝けげんそうに狭い眉間をさらに寄せている。

「これからそれを確かめに行くの。雛子も早く……あつ、雛！」

会話が終わる前に雛子は。パタパタと走り出す。タマもそれに続いた。

「わっ、すごい人」

教室に着くと、すでに人だかりができていた。

それにしても生徒たちの様子が少しおかしいと思った。好奇心だけではなく、どこか異常な熱を帯びた雰囲気。じつとりと汗ばむような空気が教室から伝わってくる。教室を覗き込む生徒たちも妙に瞳をぎらつかせ、異常な熱気をさらに過熱させている。

耳をすませば、なにやら男女の声も聞こえてくる。笑っているような、泣いているような、雛子があまり聞いたことのない種類の声。それまでクリスに会えると高揚していた気持ちが一気に萎しぼんで、なんだかイヤな予感がしてきた。

『雛子、いくぞ』

「あつ、タマさん」

人混みをすり抜けていく白ネコを追って、雛子も入口へと向かう。タマが先導してくれたお陰で、比較的楽に教室の中に辿り着けた。

「あつ、あれはクリスさ……っ!?!」

目の前で練り広げられている淫蕩な光景に、雛子は絶句した。

ブラウスをはだけ、スカートどころか下着も穿いてない破廉恥な姿の赤毛ロングの少女が、男子生徒の腰に跨って腰を振っているではないか。さらに両手にもペニスを握り締め、左右交互に首を振りながらフェラ奉仕をしている。

「んはっ……くちゅっ……はああ、オチ○ポ最高ですわあ……んふうっ……濃くてくっさいザーメン、もつと飲ませてえ……あふっ、ちゅばっちゅばあっ！」

浅ましいヨガリ声を振りまきながら、同時に三本のペニスに奉仕していく。それは龍皇寺クリスに間違いなかった。

ズッポツ……ジュルッ……クチュッ……ズボツ、ジュボオツ！

プリンと張りのあるヒップが上下し、濡れた唇が肉棒を吸いしゃぶるたび、淫靡な音が神聖なる教室に響き渡る。

「うわっ、もう我慢できねえよ、会長」

「すげえ、クリス様、気持ちよすぎるっ。限界だ！」

あつと言う間に少年たちは臨界点を迎え、次々と果てさせられていった。口腔へ腔内へ、そして淫気で火照った顔面へと白濁が飛沫しぶきを上げた。

「はあっ、ああはああっ！ もう出ちゃったの？ んふうっ、でもオチ○ポミルクう、美味いですわあ！ んっくうん……もつと、もつと頂戴い……ねろ、れるおっ！」

名残惜しそうに尿道に残った精液まで啜り飲み、淫乱少女は唇をペロリと舐める。

「おお、すげえ生徒会長、エロエロじゃん」

「いやだわ、龍皇寺さんったら、何やってんのよ。信じらんない！」

「変態よ、変質者よ。あんなのクリス様のはずがないわ。ニセ者よ！」

「変態でもニセ者でも何でもいいぜ。次は俺の番だ」

取り囲んでいた野次馬の中から一人二人と男子生徒が進み出て、生徒会長に抱きついた。今度は背後から犯しながら、唇にも勃起を突き出す。少女はすぐさまペニスにしゃぶりつき、ねっとり舌を絡ませていった。

「んふうっ……わたくしい、変態なお。こんなにいっぱいオチ○ポオ……あはぁんっ……うれしいですわぁ……あ、あ、あ、あん！」

ポニーテールを振り乱し、激しくペニスを求める変態少女。

赤みを帯びた唇がペニスの上を滑らかに前後し、思春期の青い精を貪ろうとする。ヴァギナからは流し込まれたザーメンがドロドロと溢れ出し、グチュグチュツといやらしすぎる匂いと音を神聖な教室に振りまいた。

「んちゅ……はやくミルク飲ませてえ……ザーメン好きなお……はぁん……オマ○コにも、どんどん出していいのよ……生でハメて、いっぱい注ぎ込んでえ……あぁん」
「う、うわ、もう……出るっ！」

妖艶な仕草と娼婦もまっ青のテクニクに、少年たちが堪えられるはずもなく、一分と保たずに射精に追い込まれてしまう。

「ンはぁ……あぁん……美味しい……でもまだ全然足りませんわぁ」
観衆に向けてクリスはお尻を突き出し、両手で尻タブを掻き広げた。



第四章 エレガントピッチ

「ンっつぐう！ うあああああああ~~~~ンっつ!!」

熱蠟のように熱く粘っこい獣の精が、胎内奥深くに撃ち込まれる。凄まじい量の生殖液を注ぎ込まれ、お腹が子宮ごと膨らんでしまいそう。

「あ、ああああああつ！ あつい……ひっ、ああつ！ そんなあ……うああ、入ってくるう……け、獣の子種が……私の中にい……あああああ~~~~っ！」

焦らされて火照った媚肉にはたまらない刺激だ。灼熱の快美の矢が心臓を突き抜けて脳に突き刺さる。パチパチと脛の裏で火花が散って、意識が粉々に砕かれていく。

（~~~~ッ!?!）

だが、そこでエクスタシーの波が急激に消えてしまう。またしてもスライムに吸収されてしまったのだ。

「そんなあ……ひっ、ひいんっ！ ああああ……うううっ」

決してイクことのできないもどかしさに気が狂いそうになりながら、ヴァネッサはピクピクと全身の筋肉を震わせる。それに加えて女として最も大切なところに獣の汚濁を注ぎ込まれてしまったという事実が、ドロリと粘る熱さとなつて胎内に染み渡る。

「ハアハア……うう……こんなのひどい……」

それが獣人に犯されたことなのか、イケないことなのか。自分でもわからないままヴァネッサは弱々しく呟く。だが絶望する間もなく、次の囚人が襲いかかってきた。

「ほれ、今度は後ろから犯してやるで」

象のような顔を持つ男に腰を持ち上げられ、四つん這いの格好にさせられた。自由を奪われている身体は男たちに逆らえず、白磁の双臂が高く掲げられ、衆目に晒される。

「ああ、こんなはしたない格好なんて……」

「ええ尻やな。生唾モノやで。ここにぶち込んだら……」

熟れた柔らかさと、初々しい張りを併せ持つ媚尻を、いやらしい手つきで撫で回す象男。その指がアヌスの辺りの違和感を感じ取る。

「何や、尻にバイブがはいつとるんか？」

「う、あうう……そ、それに、触ってはいけません……ううう」

「儂はこつちでもエエンや。なんなら抜いてやろうか？」

「ああ、やめて……抜かないで」

ツンツンとアナルストッパーの底を突かれて、ヴァネッサは慌ててお尻をくねらせた。スライムを体外に排泄することができれば、この焦らし地獄から逃れられるかもしれない。しかしその惨めな姿を大勢の男たちに見られるくらいなら、このまま死んだほうがマシだ。

「エロいオモチャをくわえておきたいんか。欲張りな尻やな。ほんなら、こつちを頂くか」
ガッシリ腰をつかんだ象男が、背後から剛棒を埋め込んだ。

「う、ううああっ……そんな、またあ……っ！　もう……穢されるのはいやあっ……はあ

ああうううんっ！」

「逃がさへんで。オマ○コの奥の奥まで穢してやるさかいな」

熊男の巨根に犯された直後の蜜孔に象男の逞しい勃起がズブズブとはまり込んでくる。挿入につれて膣内に溜まっていた白濁がドブドブと溢れ出してきた。

「うほっ、こりゃあ、ええわ。トロトロに蕩けとるで」

「あっああ……い、いやあ……ああう……入ってくるう……んんっ……んはああんっ」

熊獣人の獣毛巨根にブラッシングされた粘膜は驚くほど敏感になっており、入れられただけで痺れるような快感が全身に広がってくる。ビリビリと背筋が痺れ、床についた手が強張って、硬い石床を引っ掻いた。

（そんな……もう……きちゃうっ!?!）

絶頂直前で滞留していた官能のうねりが、すぐさま津波のように押し寄せてきた。歯を食い縛り衝撃に堪えようとするヴァネッサだが……。

じゅぶうっ！　じゅるるるるっ！　ぐちゅううんっ！

「ひあっぐうあ……あ、ああ……かはあ……っ」

スライムによってエクスタシーをかき消されてしまい、四つん這いのまま手足をガクガクと全身を痙攣させた。

（あああ……も、もう……死んじゃう……）

ギリギリと白い歯を食い縛る美貌が紅潮し、脂汗が噴き出す。焦らしと快樂の二重奏は、砂浜に打ち寄せる波濤のように確実に聖女の理性を削り取ってゆく。

「なんや、挿入しただけでいきそうなんか？ スケベな女やな。総帥令嬢がこんな淫乱やつたとは、思いも寄らんかったわ」

「こんなスケベ女には一本じゃ足りないでしょうねえ」

コウモリの翼を生やした瘦せた獣人が前から迫った。オネエ言葉のくせにペニスは異常に長く節くれて、鉄の槍のように硬く勃起している。

「私は死人使いだから、とつても臭いわよお。ほら、ナメナメしなさい」

「ン、ぐっ、むふう……ヒたない……ンあああああむっ！」

心では拒否しても唇が勝手に開き、舌が異形のペニスを迎えてしまう。

（ああ、臭い……とつても臭いいいっ！）

鱧^サえた腐肉の臭いが口から鼻腔にツーンと抜ける。アイマスクの下で涙が滲み、強烈な異臭に目眩^{めまい}を覚えるほど。うなじから肩までサアッと鳥肌が立った。

「遠慮せずに舐めなさい。あんたが大好きなチ○ポよお」

「んんんっ……いやあ……あ、ああ……くちゅちゅぶ……きたない……んふっ、じゅるるるっ……んはああ……っ」

命じられるままオズオズと舌が動き出し、根元から先端に向かってペニスを舐め上げて

ゆく。ゴツゴツと節くれた感触が汚辱感を倍増させる。味もひどいもので舌がビリビリ痺れてしまうほどだ。これまで世界中の高級食材や超高級ワインなどを嗜たしなんできた舌の上に、不潔な恥垢が擦りつけられる。おそらくヴァネッサの人生において最低最悪の味覚だったろう。

「へへへ。俺たちも頼むぜ。もうピンピンだ」

両手をつかまれ、別の獣人の勃起も握らされた。

(あ、あ……オチンチン……なんて熱くて……大きい……)

ヤケドしそうな熱さに驚きつつも、乳首やお尻を抓つかられて、手指がオズオズと動き出す。中指と薬指で作った輪が、男根の上を上下する。

「こりやまた臭そうなチ○ポやな。しかも三本同時とは見ているほうがきついで」

「そんなことないわよ、ねえ。オチ○ポとつてもおいしいでしょう？」

「んっ……むう……はああん……お、おいしくなんかあ……ああ、くさい……ねられるおっ……もう、なめさせないしえ……んちゅ、くちゅばあ」

「好きもののくせして素直になれよ」

唾液に濡れた亀頭をグイグイと両頬に擦りつけられ、鈴口から滲み出た先走り汁までも塗りたくられる。顔中が先走り汁でヌルヌルだ。

(んああ……穢されてく……私……どんだん、穢されてしまう……)

唾液と混ざり合うほどに臭いはきつくなる。その強烈な異臭が肌に染み込んでとれなくなってしまうそう。普段のヴァネッサなら、もう死を選んでいただろう。

(でも……どうして……?)

汚され穢されるほどに、魂の奥底から妖しい昂奮がこみ上げてくる。世界一の財団総帥としてのプライドや権威を徹底的に破壊され、最下層の獣人の慰み者へと貶められていくことに不思議な心地よさを感じてしまう。

ヴァルチャアに責められ、植えつけられたマゾの種がいよいよ萌芽しようとしているのか。いつしか肌全体が桃色を帯び、呼吸もせわしなく加速している。舌もねつとりとよく動き、二本を交互に吸いしやぶる。象男に犯される蜜孔からも、新たな蜜がジワジワと溢れ出していった。

「うっとりした顔しちゃって。もつと深くくわえるのよ。淫乱総帥様」

「ンはあぁンッ! いひや……はうん、むぐう……んんっ!」

「イヤと言いなながら、同時に四本もチ○ポくわえて感じとるやないか。ほんま、いやらしい変態女やで」

象男が腕を伸ばし、重力に引かれて垂れ下がったたわわな乳果を愛撫する。白い塊が波打つように形を変え、振り子のように揺れる。

「あ、あぁん。へ、変態なんてえ……あぁあ……むう」

罵倒され蔑さげすまれるほどに、ゾクゾクと爛れた昂奮が背筋を舐め上げる。魂は一步ずつ、墮落への螺旋階段を歩まされてゆく。

もっと穢けされたい……もっと貶められたい……そんな倒錯した欲求がふと頭を掠めたりもした。

「俺たちにも触らせろよ」「見ているだけじゃつまらねえ」

令嬢の破滅願望を感じたのか、それまで周りから見ていた囚人たちも手を伸ばしてきた。「でさえ乳だぜ。まるでスイカだな」

四方から伸びた手がズシリと感じる重さを堪能しながら、荒々しく揉み捏ねる。さらに敏感なニップルを指で挟んで、乳搾りのようにしごいたりもする。乳頭に突き刺さった快樂の針が肺を突き抜け心臓を締めつける。

「ああ……胸までえ……あああ……」

焦らし責めの効果はすでに全身に及んでいた。揉み廻られる乳房からも、凄まじい乳悦が波紋のように広がり、それだけで気をやってしまいそうだった。

「んむっ……はあああ……オッパイ……んんっくう……さ、さわらないれえ……ちゅぱちゅぷっ……ひっ、ヒびれちやうっ……くちゅ……んむふう」

「太ももはムチムチだし、尻もプリプリだ。さすがお嬢さまはいい身体してやがる」

セクシーなお尻の弾力を楽しまれ、柔らかな太ももの内側を撫でられた。囚人たちのゴ

ツイ指や掌に弄ばれていると、自分はもう淫らな奴隷に堕ちてしまったのだという気がしてくる。

「んはぁぁん……おしりもお……あぁぁおおつ……れんぶ……身体中、感じひゃううつ！ あん、あぁぁん！」

「クリちゃんにもサービスしてやるからな。おら、もつと勃起させてみる」

愛液にまみれた肉芽をグリグリと押し揉まれて、痛みにも似た快感が子宮に突き刺さる。「あひいつ、ふひいんつ、はひいんつ！」

（も、もうイカせて……誰か……私をなんとかしてえ！）

煮えたぎるような淫気に包まれ、もう何十回もイっているはずの快楽を味わわれつつも、絶頂することができない。

次第にワケがわからなくなり、ヴァネッサは狂ったように死人使いの異臭勃起に吸いていた。食道近くまで迎え入れられるディープロートだ。

「オホホ。やつと素直になったじゃない」

高貴なる令嬢を奴隷のように扱って、死人使いは満足げに鼻を鳴らした。美人総帥の唇の中で、どす黒いペニスはますます硬く反り返り、膨れた亀頭の先端からトロトロと牡蜜が湧き出している。快感をそのまま勢いに変えて、頭をつかんでイラマチオを開始する。

「んぐっ！ むぐっ！ あふううんっ！ くちゅんっ！」

「こんなエロ女が世界一のセレブとは、お笑いやで。おら、もつとケツを振って、締めつけるんや」

ズンズンと子宮にも追撃のピストンを撃ち込まれ、ヴァネッサは四つん這いの身体をくねらせる。まるで一本の太い淫棒で串刺しにされてしまったようだ。

「あつ、あああつ、おおっ！ あはあ、ああああん！ も、もう……」

爛れるような肉悦が秘奥から全身へ燃え広がってゆく。息もつけないほど肉体を昂ぶられるが、唇を犯す腐肉棒が呼吸もさせてくれない。スライム浣腸で張りつめた腸管にもピンピン響き、今にも漏らしてしまいそうな恐怖にアヌスが縮み上がる。

（これがなければ……これさえ、なければあ……）

絶頂を封じるスライムが恨めしく、焦燥を振りほどきたい一心でヴァネッサは暴れ馬の如くお尻を振り立てる。その激しい動きが象男の射精中枢を刺激した。

「おおっ！ そんなにされたら、たまらんわ！ くうっ！ 出るうっ！」

媚肉にきつく包まれながら、子宮口に食い込んだ獣根が渾身の精を解き放つ。

ドビュッ！ ドビュッ！ ドビュッ！ ドクドクドクンッ！

「んはあああゝゝゝゝンッ！ 熱いっ、んぐうっ……ひっ、ひいんっ……くるう、くちゅっ……くるつちやううっ！ あああむっ」

子宮胎内に染み込む獣精の灼熱感が、爆発するマグマのような勢いでヴァネッサを官能



「はあん。ジグレット様あ。もうあんなヤツのことなんか放っておいて、早く子種をお恵みくださいませえ♥ うふうん」

二本差しのお尻をくねらせ、クリスは甘えた声でおねだりをする。邪悪な蛇と抱き合う姿は、悪魔的な黒衣と相まって墮落の雰囲気濃厚に漂う。

これ見よがしに愛らしい舌先を生臭い蛇舌に擦りつけ、ぐちゅぐちゅと唾液を混ぜあう。蛇の口腔は生肉が腐ったような腐臭に満ちていたが、クリスには芳しい愛の芳香に感じられ、子宮がジュンツと濡れてしまう。お返しとばかり潜り込んできた蛇舌に舌を搦め捕られ、唾液をドロドロと流し込まれて、身も心も溶けてしまいそうな高揚感に包まれた。

「んはああん♥ あああん♥ はあああん……っ♥」

ただの呼吸が甘えるような吐息へと変換された。僅かに腰を振る動きが蜜爩の締めつけとなり、噴き出す汗も牝のフェロモンを発散する香水へと変わる。身体の隅々、あらゆる動きが、ジグレットを愛するという行為へ集約されていく。

「グフフフ。いいぞ、それでこそ俺の奴隷妻だ」

勝ち誇ったジグレットの股間から伸びた男根触手が二本、クリスとの結合部に迫る。とろけきった媚粘膜に身をくねらせ、膣口にさらに潜り込もうとする。

「これで確実に孕ませてやるからな」

すでに埋められている蜜洞に無理矢理二本追加でねじ込もうというのだ。

(ああ……っ。そんなにいい……♥)

常識で考えれば、三本もの巨根をヴァギナに受け入れるなどあり得ない。

だが淫魔のような身体にされたクリスは嬉々として股を広げ、受け入れの態勢をとる。

「お前の身体は俺のどんな責めにも堪えられる。その鎧にはそういう効果もあるのだ」

令嬢の期待に応えるように、二本の男根が侵入を開始する。メリメリと音がするように蜜爨がこじ開けられ、ゴムのように粘膜が伸びていく。

「んふっ！ むうっ！ ンあ……あああああ~~~~ンッ♥」

「それでも感じるとは、たいした牝だぜ」

驚いたことに蜜に濡れた粘膜は十分に広がって、三本の巨根触手を呑み込み始めた。クリスはさらに淫肉を擦りつけて、快楽を貪ろうとしている。

「あひいっ！ イイ……ンはあ、入って……しゅごひいいんっ！ あああああん！」

最も太いカリの部分が通過し、クリスはギクンと背筋を反らせる。秘孔は傷もなく、見事に三本を受け入れていた。

「ああ……もつとお……んうん……もつと奥まできてえ♥」

それでもクリスはまだ満足しない。快楽の中心、もつとも愛されたいところはもつと奥にある女の神聖なる器官、子宮なのだ。

「おらおら、行くぜえ」

「ハアハア……ジグレットさまあ……はああうん……もう……もうイキそうですの……愛を……注ぎ込んで……妊娠させてえ♥」

「いいぜ。だがもう少し妻に相応しい呼び方があるだろう？」

ニイツと嗤われてクリスはしばらく考える。そして思い至ったのか、パアツと恥じらいの笑みを満面に浮かべた。

「はい……あ……あなた……♥ あああん！」

自らの言葉に昂奮し、クリスはブルブルツと胴震いする。愛する男と結ばれたという実感がさらに強まったのだ。

「はああはあ、あなたのオチ○ポで、クリスに種付けして♥ あああん♥ 子宮の中に、いっぱい愛を注ぎ込んで欲しいのぉ♥ お問い合わせ、あなた♥」

感極まったようにジグレットの首に両腕を回し、唇を差し出す。鱗に覆われた爬虫類顔は毒蛇そのものの不気味さだが、今のクリスにとつては愛おしい夫の顔なのだ。

「んはあん……わたくしはあなただけのモノですわ。んふうっ……この身体のすべてであなを愛しますわあ……くちゅぱあっ♥ あなたもわたくしのこと、もつと愛してえ♥」

膣肉も子宮口もジグレットのペニスをしつかり締めつけて食欲に快楽を貪る。全身の快感が子宮に集まって共鳴し、クリスを桃色に霞む頂上へと押し上げていく。

「も、もうイキそうですわ……あああ、ああ……もうイかせて……イかせてください……

…はう、あああん♥」

目前に迫ったエクスタシーに一刻も早く辿り着こうと、奴隷妻は白濁に濡れたお尻の丸みを痙攣させ、何度も背筋を伸び上がらせた。最奥を貫く灼熱の棒から火が着いて、身体が内側から焼き尽くされてしまいそう。あまりの激しさに乳房が上下に跳ね踊り、赤毛が妖艶に波打つ。女の性を全開にして淫悦の階段を駆け上がっていく。

「グククッ。では俺の子を孕みたいんだな。ハアハア、子宮にも鍵をかけられたいんだな」
 三本のドリルペニスで子宮を抉りながらジグレットが訊く。括約筋が勃起の根元を食い締め、カズノコ天井が膣部をくすぐり、子宮口がカリ首をしごき、子宮が亀頭部を吸いしやぶる。これまであらゆる贅と快楽を貪ってきたジグレットでさえも、夢中になる気持ちよさだ。

「あああん…：欲しいです、欲しいのお。ハアハア…：子宮にも鍵をかけて、あなたの愛を注ぎ込んで、赤ちゃんを孕ませてえ…：あああん♥」

女のすべてを捧げ愛を誓うクリス。その姿をガーランドは呆然と見続けるしかない。

「聞きましたか、精霊さん。クリスさんはもうジグレット様のモノです」

「うう…：ああ…：クリスう…：」

ガーランドも限界ギリギリまで追い込まれていた。

雛子の触手男根にアヌスを挟まれ、射精封じされたペニスをしごき上げられて、暴発寸前のもどかしさが刃のように銀髪 of 精霊の理性を切り刻む。

ペニスの中で白濁が出口を求めて暴れ回り、噴火直前のマグマのような熱さが尿道内をジワジワと這い登ってくる。まっ赤に膨れ上がった亀頭はますます敏感になり、シユツシユツと手指を往復されるたびに快楽の火花が脳内で弾け飛んだ。

「精霊よ、一応お前の意見も聞いておいてやるぜ。クリスを孕ませて欲しいか？」
「く……うう……そんなこと……」

これ以上ないほど残酷な質問を投げかけられ、悔しさのあまり噛む唇が裂けて血が出そうだ。だが心のどこかで、この状況に昂奮していることに気づく。ペニスを勃起させている真の要因は触手責めなんかではなく、その倒錯した破滅願望なのだ。

(ちがう……ちがう……そんなはずは……)

「はあ、はあん、ガーランド……あなたからもジグレット様にお願いしなさい。んっああん……いつまでわたくしの恋人気取りでいますのよ？」

その逡巡を押し潰すようにクリスが罵声を浴びせてくる。

「ジグレット様にお願いするんですよ。そうすれば楽になれます」

冷酷な笑みを浮かべる雛子の手が裏筋をスウツと撫で上げる。そこは丁度触手が潜り込んでいる辺りだ。指の刺激を受けて、触手が少しずつ上昇していく。

「うあ、ああああつ！」

爆発寸前のギリギリのペニスに激烈な快感刺激を突き通されて、ガーランドは狂ったように悶絶させられた。触手が上昇するにつれて射精欲求がますます強まる。あと僅か、数センチで触手は抜け、射精できる。その期待が全身の血を沸騰させ、開いた毛穴から汗がドツと噴き出した。

「ほらほら、たまらないでしょ？ イキたいでしょう？ 言わないと戻しちゃいますよ」

「あつ、ああつ、あああおお——っ！」

抜き差しされ、快感火花がペニスの中を駆け抜け、陰囊を直撃する。勃起はビクンビクンと虚しい空撃ちを繰り返し、射精できない苦しさを訴える。煮えたぎる血流が集まって、ますますペニスはいきり立ち、鈴口に食い込む触手が甘美な痛みも伝えてくる。それがさらにペニスを勃起させ、苦痛もさらに強くなる無限ループ。気が狂いそうなもどかしさの中、あの倒錯願望がハッキリと頭をもたげてきた。

「い、言います……言いますから……あああ……もう出させて……く、くださいいっ！」
勃起を両手で激しく摩擦しながら、少年精霊は屈服の声を上げてしまう。ジグレットに對してというより、自らに芽生えた寝取られのマゾヒズムに屈してしまったのだ。

「ウフフフ。ではこう言ってください」

「はあはあ……ジ、ジグレット……さ……ま……うう……」

雛子に囁かれた言葉を、血を吐く思いで口にする。

「ど、どうか……ああ、ジグレット様の……優秀な子種で……ハアハア……ク、クリスに……た、種付けして……は、孕ませてやってください……ううああっ！」

「よくできましたあ。ご褒美に寝取られち○ポから、マゾミルクを出させてあげます」

言い終わると同時に触手が引き抜かれ、ペニスの中を凄まじい快楽が突き抜ける。それは愛する者を失う絶望と引き替えの破滅的な愉悦だった。自虐の魔悦にとろけた脳内にクリスと過ごした日々がよぎっては、次々と砕け散っていく。

「ああああっ！ クリス、出るっ！ 出ちやうっ！ マゾミルク出ちやうくくくッ!!」
ドビュッドピュッ！ ビュルルルウウウウウッ！

絶叫と同時に陰茎がポンプのように拍動し、信じられないほど大量の白濁が噴水のように噴き上がった。

「あっあああ……あああ……うああ……」

最大の屈辱と最高の快楽を同時に味わわれ、ガーランドの意識はこの世の果てまで弾き飛ばされる。白目を剥いて失神し、雛子の胸に倒れてしまう。

「フハハハハッ！ 俺の勝ちだ。さあ、クリス、孕むがいいっ！」

ゾクゾクとかつてない高揚感に包まれ、ジグレットは完全勝利の雄叫びを上げる。

「あああああん♥ きて、きてえ！ クリスの中に……子宮の中にい、ああああん……ザ
ーメン、たつぷり注ぎ込んで♥♥ クリスを孕ませてえ……あなた♥♥」
クネクネ腰を振って赤髪を振り乱し、おもねる眼差しで媚びを売る幼妻。潤んだ瞳がジ
グレットを誘惑し、犠性を激しく煽る。

本来なら闘いの後で殺すべきだったろうが、ジグレットにそれはできなかつた。クリス
があまりに美しすぎたのだ。殺意を上回る愛が彼を荒馬の如く突き動かしていた。

「くおおおっ！ もうたまらん、くらえええっ！ 淫乱マ○コに種付けだ！」

腰を思いきり突き出して剛直を幼妻の最深部にまでぶち込む。とろけるような秘粘膜に
ペニスを包まれ、粘膜の海に頭まで浸かっている錯覚すら覚えた。目眩を感じるほどの法
悦が、腰椎を焦がしながら射精中枢を直撃する。奴隷令嬢の子宮内で三本の勃起がいな
き、灼熱の精を撃ち放った。

ブッシャアアアアアアアアッ！ ドビュドビュドビュウウッ！

「んああああッ！ きてるっ、中にい……あつ、ああああっ……子宮にい！」

フィアンセの目の前で種付けを請い、クリスは背徳の快楽にピンヒールつま先を反り
返らせた。大量の精子が令嬢の子宮内に溢れかえり、卵が目掛けて殺到していく。

「ああん、あなた♥ すごいっ！ 子種が来るう、お腹に、子宮に溢れちゃううっ！
んあああああつ！ 孕んじやうっ……赤ちゃんできちゃううっ……っ♥」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

仙獄学園戦姫

ノブナガツ! comic



信長が、秀吉が、義元が、エツチにバトルにと漫画で大活躍！
もうひとつの『仙獄学園戦姫ノブナガツ!』がここにある!!

待たせたら

毎月中旬
発売!!

18歳未満の方は
購入できません

18

漫画：老眼
原作：斐之嘉和
キャラクター原案：SAIPACO

戦うヒロインが屈服させられちゃうアンソロジーコミックス
『闘神艶戯』偶数号にて連載中!

編集・発行 キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/690円(税込)



全国書店で
好評
発売中

カノヲ
少年に封じられた魔神降臨の刻!
とき
玲音と冬馬が交差する2人の物語、衝撃の最終章へ!

女幹部メル様のセカイ征服計画!

【小説】高岡智空 / 挿絵：鈴眼依羅

魔海少女
ルルイエ・ルル2

【小説】羽沢向 / 挿絵：ピエール☆よしお



全国書店で
好評
発売中

クトゥルフの娘たちが
学園祭でメイドさんに変身!?
ルルたちに新たな邪神が這い寄る!



全国書店で
好評
発売中

お腹の子供のパパを
探してます!!
ボテ腹魔法少女が父親探しにむすむす!

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

【小説】さかき傘 / 挿絵：天海雪乃

既刊LINEUP
全国書店で好評発売中

- 仙宮宇無戦姫 / ノブナツ! ①～③
- BLANGEL 輪になりに踊る悪者の夜
- 不死の吸血鬼がPSのご主人様を募集しているようです

- 思春期なアダム ①～③
- 呪曲喰らい団 [カースイーター] 1
- 女幹部メル様のセカイ征服計画!
- 借金お嬢小姐 ①～③
- 無敵の姫騎士がPMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット



仙獄学艶戦姫ノブナガツ!

第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園——西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!! 平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで——!?

小説●**斐芝嘉和**
挿絵●**SAIPACo.**



全国書店で
**好評
発売中**

仙獄学艶戦姫ノブナガツ! 弐

北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾く美姫〉景虎、宇佐美く奈々〉定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!! 敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●**斐芝嘉和**
挿絵●**SAIPACo.**



全国書店で
**好評
発売中**



仙獄学艶戦姫ノブナガツ！参

信玄、出陣！

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●**斐芝嘉和**
挿絵●**SAIPACo.**



全国書店で
好評
発売中

BLANGEL

輪になりて踊る患者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●**夜士郎**
原作・挿絵●**渡瀬行人**



全国書店で
好評
発売中



思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田陸月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！ ごく普通な少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する！

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃



全国書店で
好評発売中

思春期なアダム 2

背後をならう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、陸月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！ “蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、陸月も新たな局面に…?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃



全国書店で
好評発売中

借金お嬢
クリス

42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円! クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに! 果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で
好評
発売中借金お嬢
クリス2

42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル!? 水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍(?)に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で
好評
発売中

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!